

日本中央と日之本將軍

高橋 富雄

一 日本中央ということ

古代の青森県には「つぼの碑」というものがあつたと言われ、その所在地は上北郡甲地村（東北町）とされてきた。戦後、その碑文「日本中央」と刻した「日本中央碑」なるものが出土したというので、一時話題になったことがある。筆者も見学した。

また中世の青森県には、安東氏という豪族が、十三湊によつて「日之本將軍」と称していたということが、『羽賀寺縁起』の記事によつて知られている。

この日本中央というのはどういう意味なのか、また日之本將軍というのも、どういうわけで日之本なのか、よくわかっていない。ましてこの二つに何らかのかかわりがあるのかないのかについては、これまでものところよるべき研究はなかつたと言つてよい。拙著『辺境』（昭和五四年教育社）で、これについてかなり立ち入った言及をしておいたが、ここに改めて整理した形で考えておくことにする。

まず「日本中央碑」というものについては、古代末期・中世初頭の歌学者頼昭の歌学書『袖中抄』に「いしぶみ」と題して、次のように関説されている。

いしぶみのけふのほそ布はつはつに

あひみても猶あかぬけさかな

頼昭云、いしぶみとは、陸奥のおくにつぼのいしぶみあり。日本のはたと云り。但し田村の將軍、征夷の時、弓のはずにて石の面に日本中央のよしを書付けたれば、石文と云と云り。信家の待從の申しは、石の面、ながき四五丈計なるに文をえり付けたり。其所をつぼと云也（それをつぼとはいふ也）私云、みちの国は東のはたとおもへど、えぞの嶋は多くて千嶋とも云ば、陸地をいはんに、日本の中央にても待るにこそ。

近世、このつぼのいしぶみを、仙台藩関係の学者は「壺碑」として、多賀城碑をさすものと解釈したが、これは付会である。これは、『袖中抄』にもあるように、つぼという土地に建てられた石碑としてつぼの碑なのであり、つぼは、古代史上の蝦夷村の都母村にあたり、後世の上北郡方面にあたること、甲地村の坪の字名がその名残りになるとは、ほぼ疑いないから、これは、青森県南東部について言われたものと認定しておいてよいであろう。

さてこの歌は「いしぶみやけふのせば布はつはつに逢ひ見てもなほあかぬ中かな」という形で『歌林良材集』にも見える。「由緒ある歌」

とされているから、これは古歌として伝統をなしていたものであることがわかる。なお、結句は「色かな」「君かな」などとしても伝えられていた。また「いしぶみ」の歌としては、『夫木和歌集』文部に藤原清輔朝臣の「いしぶみやつがるのをちにありとまきえぞ世の中を思ひはなれぬ」というのも別にある。

ところで、この「いしぶみ」というのが「つぼのいしぶみ」のことであることは「袖中抄」の記事でわかるが、清輔の歌が「つぼのいしぶみの事」として後世掲出せられるようになっていたことでも、そのことは確かめられる。

「つぼのいしぶみ」の歌になると、いっそうその数を増して行く。

『夫木和歌集』には有名な西行の「みちのくのおくゆかしくぞ思ほゆる壺の石ぶみそとはまかせ」の歌と、寂蓮法師の「陸奥のつぼのいしぶみありとまきいづれかこひのさかひなるらん」があり、『新古今和歌集』には前右大将頼朝の「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬかき盡してよつぼの石ぶみ」がある。仙台藩儒佐久間洞巖の「奥羽観蹟聞老志」壺碑条下には、これに関する主要な歌が網羅されている。

以上によってもほぼ明らかのように、このいしぶみすなわちつぼのいしぶみというのは、まず平安末期から著名になったもので、それ以前、歌枕としてそれが知られていたことを確認するものはない。しかし、平安末期から鎌倉初期にかけて、顕昭・清輔・西行・頼朝・寂蓮・慈鎮などという著名な歌人たちが、そろってこれをよんでいることからすると、古代末期ごろからのみちのく趣味の中で、このいしぶみブームのおこってきていることが知られるのである。

ただし、ここで慎重に注意を要することがある。それは、このみちのく趣味には、はっきりした地域の限定があることである。これは、みちのくのうちでも奥みちのく、奥州北部から北海道にかけてのみちのくについてのものである。そのことを西行の歌が代表して確認している。「みちのくのおくゆかしくぞおもほゆる」。それはみちのくの中でも特にそのおくにあこがれることだったのである。

そのみちのくのおくゆかしくとしての風尚は、西行の場合「つぼのいしぶみ・そのの涙かぜ」に向けられていた。顕昭の場合は「おもひこそ千島のおくをへだてねどえぞかよはさぬ壺の石ぶみ」であったし、清輔の場合にはいしぶみの所在は「つがるのをちにありとき」いていたのである。外ヶ浜・津軽・千島・えぞ、それらのすべてにかかわりおそらくその^{シンボル}徴標のようなものとして、このいしぶみはうたわれていたのである。文学的に言えば、これは「北の紋章」ということになる。みちのく奥へのあこがれ（奥ゆかしさ）は、これによって象徴されていたのである。

わたくしは、つぼのいしぶみというものの歴史的な性格を明らかにするための基礎的手続きの一つとして、これが特にみちのくのおく、つまり北辺みちのくにかかわるといふことの確認が必要だと思う。しかもそれは寂蓮の歌に見る如く、大事な境を画する目印のようなものとして、北の世界を象徴するところのシンボル・マークでもあった。そのため、津軽も千島も、すべていしぶみを頂点とする世界のうちと考えられていたのである。日本中央といふことの意味も、いしぶみのこの存在規定から考え出されなければならないのである。

二 袖中抄といしぶみ歌

「袖中抄」によれば、つばのいしぶみというのは、坂上田村麻呂征夷の時に建てたというから、事実とすれば平安初頭ということになる。田村麻呂が奥蝦夷を討って、現今の盛岡市付近までを政府治下に編成したのは、延暦二十一年（八〇二）の胆沢城、翌二十二年の志波城造営の成った時、と考えてよい。ただし田村麻呂の征服がどこまで及んだかは不明である。志波城所在地（盛岡市太田）までは問題ないにしても、その北については明証がない。弘仁二年（八一）の文室綿麻呂の経営は閉伊・貳薩にさて体に及び、この経営戦の過程で都母村の蝦夷の動きも見られるので、この経営戦が、都母村つまりいしぶみ碑所在地方面にも及んだことは確かであろう。そして文室綿麻呂の軍事行動は坂上田村麻呂の征服戦のしめくりという性格のものであったから、田村麻呂伝説の形成過程で、綿麻呂の事績まで田村麻呂事績のうちに数えられるのは、ごく自然である。だから、この日本中央碑の田村麻呂建造説は、田村麻呂伝説としては、かなり由緒のしっかりしたものと言つてよい。

都母にあるから都母の碑であるというのは正しかろうし、「石の面ながき四五丈計」と信家侍従が語つたというのも、平安末期、相当具體性を以てこのいしぶみ伝説が語り伝えられており、その碑石と称するものも実在したことを想像せしめるものである。

これだけのことから言つて、つばのいしぶみの碑文が「日本中央」という文字で伝えられていたことは疑いないであろう。

そこで問題は、このみちのくのおく、北辺において日本中央とはいふたい、どういう意味なのか、ということになる。

このことについては、「袖中抄」ですでに疑問が提起され、それに対する一定の解答も与えられているのである。

疑問、というのは、「日本の東のはて」ということがわかつていたところからおこっていた。東辺で日本中央などということは考えられないことではないか。そう自問しておいての自答なのである。「陸奥国は、たしかに日本の東のはてではある。けれども、えぞの島はたいへん多くて、千島とも言うから、陸地の長さについて言えば、このあたりが日本の中央ということにもなるからであろうか」。

いちおう理屈はつく。それにどうせそんなものあったかどうかもわからないことだから、しいて問いつめるほどのこともあるまい。多くの人たちはそんな考えかたから、この問題については、それ以上深追いすることをしなかつた。だからこれは学問上の問題にならなかつた。しかしこういう態度は正しくないと思う。伝説の扱い方・うけとめ方としても正しくないし、この問題の含む謎の歴史の掘りおこしを放棄している点でもよくないのである。

すでにのべたように、このいしぶみを問題にする人たちは、それのみちのくのおく、えぞの国にあることを知っていた。古代世界の発想においては、みちのおくは道奥は、国家の外、という意味であった。えぞというのは、観念上、異邦人エトノヒトという考えかたを意味していた。それがだんだんに擬制化してきていることはたしかであるが、そのように、日本の東辺、国のはてということがはつきり認識されていて、か

つ観念の上でも、そこは国家の外、その人たちは異邦人であるといふことがよくわかつているところを日本中央とは聞えない。たしかに平安末期には平泉藤原氏の政治力で、日本という観念がさらに北進したということも考えられるが、この日本中央という碑文は、坂上田村麻呂時代までさかのぼるものだという。律令古代のその時期においては、中華観念がいっそう厳格で、蛮民を差別する華夷内外の弁は絶対であつた。かりに地理上の中央がよそにあつたとしても、政治上の中央観念を、都から外に移すということはありえない。すなわち、この日本中央碑というのは、日本国家中央碑ではありえないのである。

これまでの歴史学では、そういう日本中央観はありえないから、これはとるに足りない伝説だとしてすててしまつていたのである。しかしそれは誤つていた。日本国家中央ということは成立しえないにしても、日本中央碑のあつたということ、正確にはあつたという伝えは事実なのだから、その伝えの中で日本中央とは何を意味したのかは明らかにしておかなければならなかつたのである。

「いしぶみやけふのほそ布」「いしぶみやつがるのをちにありときく」「おもひこそ千島のおくをへだてねど」これらの歌におけるいしぶみの用法を見ると、いしぶみというのは、決してつぼのいしぶみだけであるのではなく、つがるのいしぶみでもあり、千島のいしぶみ、ひろくえぞのいしぶみであることがわかる。「みちのくのつぼの石文ゆきてみむ」「おもふこといなみちのくのえぞいはぬつぼのいしぶみ書きつくさねば」などという慈鎮の歌では、みちのく・えぞとつぼのいしぶみとの関係は、みちのく・えぞの地にあるつぼのいしぶみ、とい

うかわりかたである。

しかし、「いしぶみやけふのほそ布、」とか、「いしぶみやつがるのをちにありときく」という時のいしぶみは、けふのほそ布やつがるに對する枕詞のような用法である。「おもひこそ」の歌などになると、千島の奥のえぞの世界まで、このいしぶみの心で代表する用法になつている。すなわち、いしぶみというのはみちのくの奥全体にかかわる枕詞的用法になつていたのである。

そのように考えてくると、そのいしぶみすなわち碑文であるところの日本中央というのは、実は奥みちのく、奥蝦夷世界のどまん中といふふうなことにしかなりえない。いつたい、そんな日本というものがあつたのだろうか。

あつたのである。日本ということ、正確には日の本といういいかたには、二通りのいいかたがあつたのである。第一のは、いうまでもなく、日本列島全体を、観念上一つの主権のもとにある国家日本としてとらえるいいかたである。これはヤマトを称していた倭国が改号したものであるから、ヤマト日の本と呼んでよいであろう。

もう一つは、せまく東北日本に限られた奥日の本である。それは人に即してえぞ日の本と呼んでもよい。日本中央の日本、日之本將軍の日本とは、この第二のえぞ日の本のことにはかならないと思われるのである。

三 日之本將軍の考え方

日本中央の日本も、日之本將軍の日之本も同じ意味で、えぞ日の本

という考え方であると言った。そこで今度は、日之本將軍というものが、どんな用法であるかを検討して、それから、それがえぞ日の本の意味であるゆえんに説き及ぶことにしたいと思う。

「羽賀寺縁起」は信用できるものであるが、そこには、次のような記事がある。

永享七年三月二十七日、寺に失火があり、全山烏有に帰した。後花園天皇が軫痛して、その復興策を臣下にたずねた。左右の者は進言した。「奥州十三湊日之本將軍安倍康季、文武該達、仏乘厚く帰す。祖來忠を献じ、名を惜む者なり。彼に賜いて復を課せば、恐らくは命を奉ぜん」。そこで帝は勅を下して寺を康季に賜った。康季はこれを光榮として八年四月、工事を始め、文安四年完成、十一月十八日、本尊の遷座を行なった。

「羽賀寺縁起」別本は、同じ趣旨を次のようにのべている。「永享七年三月二十七日、寺が火難にあつた時、奥州十三湊の日之本將軍が檀越として、莫大の貨錢を捧加（奉加）して、これを再建した」。

安倍康季はすなわち安東康季である。安東氏が十三湊にあつて「津輕守護人」を称し、また「蝦夷管領」と号していたことは、「安藤系図」や「秋田系図」にも見えるところである。安東氏が北海道の蝦夷をも支配していたことは事実なのであるが、そのおこりは、「沙汰末練書」にいわゆる東夷成敗権にあらう。鎌倉幕府の東夷成敗権は、執権北条氏の得宗支配権のうちに帰し、その津輕代官としての安東氏がこれを代行、蝦夷管領を称するにいたつたものと考えられる。「沙汰末練書」には「東夷とは□子事也」とある。「子は唐子であらう。して

みればこれは「諏訪明神縁起絵詞」にある日本・唐子・渡党のうちの唐子に当り、まさしく奥蝦夷のことである。

「新渡戸文書」には正中二年九月十一日付安東宗季護状というのがあつて、この中にも「ゆづりわたす つがるはなはのこほり けんかしましりひきのがう かのへんのがう ならびにえぞのさと（中略）御だいくわんしきの事」と見える。えぞのさとが、蝦夷の里か、それともえぞのさとで蝦夷の沙汰か、論のあるところである。しかしこのさとがさたであつても、この記事が鼻和郡と糠部郡の間に置かれてゐることから、蝦夷地の蝦夷沙汰と見るよりは、津輕地区の蝦夷沙汰を特に独立してさしたものとみるのがよからう。蝦夷地の蝦夷沙汰というのは、「沙汰末練書」を見てもわかるように、関東の重要な公権成敗権に属している。並の地頭代官職とは別途に扱われた重要事項と考えられる。わたくしはこのえぞを、津輕の中に置き、清輔の「いしぶみやつがるのをちにときくえぞ世の中を思ひはなれぬ」の津輕えぞとの系譜を示すもので、いしぶみの日本日の本がかかわるところのえぞになるものと考えるのである。

以上のようなコンテクストのもとに、わたくしは日之本將軍というのも、津輕守護人・蝦夷沙汰人・蝦夷管領というような呼称の新しい言いかえのようなものと考ええる。かつて原勝郎博士はこの日之本將軍のことにふれて夜郎自大のそしりをまねがれないとされたことがある（『奥羽沿革史論』所収「日本史上の奥州」）。しかし日之本が国家日本のことでないとなれば、問題はまったく別になつてくる。

「羽賀寺縁起」によれば、安東康季は天皇の特旨に恐懼して、この

寺の再興に誠心誠意當つたとされている。そのような勅命下の事業を記録する人たちが、征夷大將軍を僭稱するかのような田舎大名の私稱を、そのままその解説記事に載せるはずがないと思うし、第一、本人がそういう申請のしかたをすること自体ありえないことだと思われる。もしこの日之本將軍が、えぞ日の本將軍のような意味だとすれば、すこしも不都合がないばかりか、夜郎自大と正反対に蝦夷將軍と卑下していることになり、この時の事情にもよく適合する。

そこで日の本ということのそのような用法であるが、すでに金田一京助博士にりっぱな指摘がある。日の本の二つの使い分けというのは、実は博士の指摘するところだったのである。「日の本夷の考」（金田一京助選集Ⅱ「アイヌ文化志」所収）には、次のような考察が示されている。

日の本、というのは「ひのもの、やまとの国」ともあるように「やまと帝国」と了解するのが一般で、これがもっとも普遍的な「日の本」の第一義である。

しかし、日の本には、いま一つ違った第二義の用例がある。この第二義のも、根本は第一義のそれと同じで日出所の概念である。ただその適用が違っている。第一義の日の本は対外関係の上の比較的位置をさして総称的であるのに、第二義の日の本は、同じ内国についての比較的位置をさして部分的なものである。前者は日本帝国（日本国）の意味なのに、後者では、わが国の中の極東の意味にすぎない。この第二義の日の本用例は、平安朝にはまだ見えない。室町時代を中心にして、鎌倉時代から江戸時代の半ばまで、すくなくとも一部には生命を

持っていた！

金田一論文は、そのようにのべて、それを証明するために、「人国記」「倭訓栞」「一目玉鉞」「諏訪明神縁起絵詞」の関係記事をあげられている。わたくしもそのおもなものを再紹介しさらに補説しようと思うのであるが、いずれにしても、国内の極東をさすことばとしての日の本用法のあることが、これではっきりしたのである。金田一論文にいう極東というのは、みちのくないしみちのくのおく、さらにはえぞの國、の意味と解されるものであるから、これはえぞ日の本に当たると言つてよい。

こうして、ヤマト日の本、国家日の本とは別のもう一つの日の本を、えぞ日の本、みちのく日の本として、北日本に想定できることになつた。

日之本將軍はもちろん、この第二義の極東日の本將軍の意味である。日本中央の日本もこの極東日の本、エゾ日の本の意味であると考えられる。金田一博士は、この日の本用例は平安時代にはさかのぼらないとされた。しかし、別な方法で、われわれは、これを、古代までさかのぼるところの極東日の本用法と推定することができると思うのである。

四 日の本の諸用例

(一) 金田一論文には引用されていないのであるが、日の本のもっとも重要な用例の一つは、豊臣秀吉の書信にある。秀吉は小田原攻圍中の天正十八年五月一日付で、大阪の大政所宛に、次のように書き送って

いる。

さいさい文給り候。御うれしく候。こなたの事あん(案)じなされまじく候。いよいよ小だわら(小田原)かたくとりまかせ候により、はやはやくにぐに(国々)十の物八つほど申つけ候て、百せう(姓)どもまでめし出し、ゆくと申しつけ候。小だわらの事は、くわんとう(関東)・ひのもと(日の本)までのおきめ(置目)にて候ま、ほしごろし(干し殺し)に申しつくべく候間、としをとり申すべく候。

「小田原の事は、関東・日の本までの置目にて候ま、干し殺しに申しつくべく候」。いったい、この日の本というのは、どういう意味であろうか。わたくしは、太閤仕置論ないし検地論で、この日の本がどう解釈されているかを詳かにしていない。わたくしが見ているいくつかのものは、これを漠然と日本の意味にとっているかに認められる。「小田原の仕置きは、関東の仕置きにかかわる。ということになれば、ひいて日本全体の置目にかかわることになるから、これは徹底してやる」。そういうことで意味が通りそうである。しかし、よく考えてみると、そういうことではありえないのである。

いったい、秀吉のものと国家日本というのは、上方本位の西日本天下である。そのような天下国家としての日本政治というのは、小田原以前にすでにできているのであって、小田原は、その既成の日本仕置の延長・拡大なのである。小田原や関東がうまくいけば、それが日本の置目にも適用されるというのではない。逆なのである。そういうことであれば、「くわんとう・ひのもとまでのおきめ」は、関東からひ

いて国家日の本までの置目でなしに、関東から日の本地方までも及ぶ置目、という意味になる。日の本は関東と並列の日の本である。すなわち、すでに国家平均の仕置をなしおえている地帯を除いた日の本であるから、関東以北の未組織日本、金田一博士のいわゆる極東日の本、えぞ日の本であるよりほかない。現に大閤書信には、このことを裏書するもう一通の別な書信があるのである。

秀吉は、五月一日付で大政所宛に発信する前に、同じ在阪の北政所宛(直接にはその待女五さ宛)にも同趣旨を書き送っている。それは同年四月十三日付のもので、それには、「小だわらひごろしにいたし候えは、大しゆ(奥州)まで、ひま(隙)あき候間、まんぞく申すにおよばず候。二ほん(日本)三ぶん一ほど候ま、このときかたくとしをとり候ても申しつけ、ゆくゆくまでもてんか(天下)の御ためよきようにいたし候」とある。

ここでは、大しゆ(奥州)とあるのが、前ので、日の本とあるのに、ほぼ当ることが明瞭である。したがって秀吉は、関東の北に開ける極北の地みちのくが、日本国家の三分の一にも相当する広大な地域であることに特に思いをいたし、「関東はもちろんのこと、その奥のえぞの未知の地までも、天下人の仕置が及ぶことになるので、その関門となる小田原は徹底してやる」と宣言していることになる。日の本までは奥州の奥までだったのである。

念のため、この奥州というのと日の本というのが、完全に相蓋う観念であるかどうかは若干問題があり、日の本といういいかたは、奥州よりさらに奥より、えぞよりにとらえられていると理解してよいの

であるが、大まかに見れば、ほぼ同義語に用いられていると言つてよいのである。

北日本の広大な地域、国家日本の三分の一もあるという極北の地について、もう一つの日の本という地域の存在を、十六世紀の末に天下人秀吉は確認し、体制日本のために、この北辺日の本の組織を目ざしていたのである。

金田一論文もあげているのだが、第二に重要なのは、「人国記」における日の本記事である。この本の最終成立は江戸初期までくだるかもしれない。しかしその内容は、中世後期／戦国期にかかわると考えよう。

その陸奥国の部は、次のように指摘する。
陸奥国の風俗は、日本の偏鄙なる故に、人の氣の行詰りて、氣質のかたより、其の尖なる事、万丈の岩壁を見るが如くにて、邂逅道理を知るといへども、改めて知るといふことすくなく、たとえ知るといへども、江の水の流れなくて、塵芥の積りて清める事なきが如し（中略）。五十四郡の内、いずれも二つ三つに少しずつ風俗分れたれども、大樞に替る事なく、此の如し。

此の国の人は、日の本の故や、色白くして眼の色青き事多し。人の形儀いやしうて物語卑劣なれども、勇氣正しき事、日本に劣るべき国も思われざるなり。

金田一博士も指摘されているように、ここでは、日の本と日本とが、交錯して別々の意味に使われている。そして混同のおそれなく並用されているところからすれば、日の本はまだ原義通り「極東」を意味し、

国家日本の総名とはされていなかったことがわかる。しかも、ここでいっそう重要なことは、その日の本は、陸奥国でもやはり古名になりつつあったことである。なぜなら、奥州五十四郡と言えば、外ヶ浜のはてまで含むのであり、そのほかに日の本と呼ばれる地域はないのに、「此の国の人は、日の本の故や」とあるのは、「この国の人たちは、もともと日の本の国の人たちであるからだろうか」といういいかたになつてゐるからである。

ところで、その五十四郡の体制陸奥国が本来もとづくところの国というのは、えぞの国しかない。したがって、この日の本は大体えぞの国ないしえぞそのものに当ると言つてよいのである。その人が色白く眼が青い（どの範圍の陸奥の国の人をさしたかは措くとして）というような形質的特徴を注意しているのも、当時の認識におけるえぞの指摘と考えるよりほかないのである。

中世日の本がえぞをさしていたことは「諏訪明神縁起絵詞」に明証がある。「蝦夷が千島といえるは、我國の東北にあたって大海の中央にあり、日の本・唐子・渡党、此の三類、各三百三十三の島に群居せり」。この本は南北朝の延文元年の識語を持つ。中世本期において、蝦夷の種族名に「日の本」の存したことが、これで明らかなのである。

ただ、日の本はえぞの唯一の呼称ではない。また本州北辺のえぞ名ではなく、北海道地区のえぞ名になつてゐる。さらに、本州から渡つたえぞは渡党と呼ばれるもので、日の本は北海道本島蝦夷ないしは千島蝦夷だとされたりもしている（ちなみに唐子はのちのカラフトえぞ・オロッコのなまり、北海道西辺の大陸渡来人の雜種族など、諸説が

ある。)これによれば、日の本は本来、北海道ニ千島を主とした呼称であるように考えられよう。しかしこれについては、本来、本州北部を本拠にした日の本えぞが、徐々に後退し、最終的に北海道・千島地区に定着した中世的状況を報告したものと理解することもできる。すくなくとも日の本という形で、えぞ存在は、本州えぞからおこったものなのである。

わたくしはそのような考えから、日の本というのは本来、えぞの総名ないしその本国の意味に用いられ、唐子や渡党はそのもとに二次的に成立した部族名が、日の本と並列して称せられるようになったものと解している。

そこでえぞ自身にとって、これらの本国が北であったか南であったかにかかわりなく、日本古代史上の日の本本国は、本州北辺、みちのく奥地であったと言ってよいのである。

五 日の本と日高見国

金田一博士は、日の本の文献的用例は平安時代にはさかのぼらない、とされた。しかし以上の考察にもとづいて、日の本とは要するにえぞの国の意味であることを認めるならば、古代蝦夷の世界において確認できる日本は、これをえぞ日本の意味で日の本と理解することができ。つばのいしぶみの日本中央は、この意味のえぞ日の本記事とみなすことができる。「日本中央」というのも、これは「日の本中央」だったと思うのである。平安時代に日の本の称のあった証拠になるのである。

さてそれなら、この日の本はどういう意味だったのだろうか。これはその字義から言っても「日出処」の意味で、「隋書」倭国伝に見える聖徳太子の遣隋国書に日本のことを「日出ずる処」と称したのと同じ意味である。わたくしの考えでは、聖徳太子が倭国を日出国と称し、大化改新政府がヤマト国を正式に日本国と改号するにあたっては、東倭国(東国)において日の本を称する国があったことにもとづいておいた。異論も多いことと思うので、混乱を避けてここには再論しない。

日出ずる処の国というのは、国家日本の国号のよってくる根拠である。それとまったく同じ形で、しかも平行してこの島国に同時存在したというのは、何としても意外なことにように思われよう。けれども、日本が体制国家の公式呼称となった後も、この意味の日本ニ日の本がもう一つ、別な形で消滅することなくずっと並存していることからすれば、えぞ世界が日の本を称するいわれは大変古くて遠いと言わなければならぬ。「諏訪明神縁起絵詞」や「日本中央碑」のように、中世からせいぜい平安末期までしかさかのぼれないような史料では、その遠くて古いわれを証明することができない。

近世後期、谷川士清という人の国語辞典の「倭訓栞」は「ひのもと」について、こう解説している。「俗諺に奥州日の本の称あるは、日本紀に、東夷の中、日高見国あり、といえる意なるべし」。日の本といふのは、蝦夷のことを日高見国と呼んだことに由来する、という理解である。わたくしもそう思うのであるが、もしこの通りだとすると、

これは天皇のヤマト国家が日本を称するはるか前、伝説時代までさかのぼる日の本呼称である。だから、ヤマト国家が日本国を称しても、引き続きもう一つの日の本を伝統呼称として持続することができたと言えるのである。

日高見国は『日本書紀』景行二十七年紀に「東夷の中、日高見国あり、其の国人（中略）是れ総べて蝦夷と曰う」とある。日高見国は、東夷すなわちあずまの国の中でも、せまく蝦夷と呼ばれた人たちの国である。道奥蝦夷の国の意味であることは、ほとんど疑いない。

さて、それなら日高見国がどうして日の本になるのだろうか。国学者の間では、日高見国というのは、空高く日晴れた真秀の国の意味だとされている。日出する処の意味の日の本とは若干の違いがある。日の本は、日が高くなるうとする日の国、日高見は、日が高く昇りきった日の国。ニュアンスの違いはある。にもかかわらず、日の本^{もと}の国、日^{もと}を本とする国という点では、どちらも同じである。それで日高見の意味で、その通称ないし略称を日本^{ひもと}と言い、日の本^{もと}と読んだのだろうと思う。

いずれにしても、蝦夷国としては、はじめに日高見国があり、のちに蝦夷の種族およびその地について、日の本の称があるのだから、日高見と日の本との間に、読みかえないし置きかえの関係を想定しないわけにはいかないのである。日の本の前身が日高見、日高見の後身が日の本。そのような関係になるであろう。

日高見国というのが、はじめ東国、常陸国などについても言われたことは、『常陸風土記』にも明証がある。常陸の地名そのものが日高

見に負うているとも見られたりしている。わたくしは、蝦夷エミシというものが本来東国IIあずまの別名としておこったものであることから、そのえみしの国と表裏をなしていたはずの日高見国というのも、はじめ東国について成立したものだと思っている。景行二十七年紀に、東夷のうちの日高見国ありとして、いかにも日高見国がはじめからみちのく方面についておこったように伝えているのは、すこし後世的な理解によるのだと思われる。

日高見というのが、歴史上たしかな形であられるのは、平安初期、蝦夷経営戦が北上川流域を北上するようになってからである。『三代実録』貞観元年五月十八日条には「陸奥国正五位上勳五等日高見水神に従四位下を授く」とあるが、この日高見水神というのは、『延喜式』神名式に桃生郡（宮城県）六座ある式内社のうちの日高見神社に当る。桃生郡で官社に指定される水神というのは、桃生城がそれに跨って築城されたとされている大河、すなわち北上川の水神以外に考えられない。となれば日高見水神は北上川河伯のこと、北上川が貫流する地帯が日高見国であったということになる。『続日本紀』延暦八年九月十九日紀に胆沢経宮戦に関連して「日上湊」とあり、また『日本後紀』延暦十六年二月十三日紀に「威、日河の東に振い、毛狄息を屏む」とある「日河」というのも、みなこの日高見はちなむ言いかたであったと考えられる。伝承でも日高見国は蝦夷国とされていた。事実としてこの地こそは蝦夷戦争の戦われた地であった。つまり事実蝦夷国だったのである。

祝詞の大被詞には「かく依よさしまつり四方の国中に、大倭日高見国を

安国と定めまつりて」とある。この日高見国というのは国学者たちが言うように、はじめからヤマトの国をほめていうところのことばではない。日高見国は、朝廷の由緒ある伝承においても「東夷の中の蝦夷国」とされてきたからである。『奥羽沿革史論』において喜田博士が問題にされたように、大坂詞の大倭日高見国というのが、大倭即ち日高見国なのか、それとも大倭と日高見国の二つなのかで、意味が大きく違ってくるのであるが、そのどちらであるにしても、日高見国という呼称が、ヤマトと並称される事実があつての言あげである。西のヤマト、東の日高見。そういう対称であろう。

日の本というのは、その日高見国の名残りとしての蝦夷国のことである。蝦夷問題の格調を伝えることばであると言わなくてはならぬ。

六 結 語

日の本についての以上の考察は、学問上、いろいろな問題をなげかけてくる。

まず第一に、この問題は、日高見国とも関連して、蝦夷問題を、単にヤマト日本＝体制日本の外に置いて考えるのでなしに、これを国家日本の体制的成立に根源的にかかわらしめて扱わなければならないことを物語っている。大倭日高見国を安国と定めるといふことの背景には、ヤマトの国号を日本と改めたこととの関連なども考えなければならないのであつて、金田一博士がのべられているように、二つの日の本の間に何の關係もなかつたというようなことは、ほとんど考えられないのである。

第二に、日の本のおこりを日高見国に結びうる見通しを立てたことにより、蝦夷問題を、日高見国が問題になる時代と場所に拡大できることになった。わたくしは、東国・あずまという発想が、本来「とりが鳴く」という形で「日出ずる処」「日の本の国」という基本事実に出発していると思つていたのであるが、そういう問題のたてかたが、ここではいっそう具体的に可能になつてきたと思つたのである。

第三に、最近、蝦夷問題の中世的存在形態を問題にする動きが目立ってきているのであるが、日の本問題は、その中世蝦夷を、蝦夷という形をとらない蝦夷問題として、いっそう豊富な内容で、語り伝えていくものである。『諏訪明神縁起絵詞』『羽賀寺縁起』の日の本・日之本將軍や、『人国記』秀吉書信の日の本は、中世を通じて、体制内においても蝦夷がどのように生きた問題を提起し続けていたかをよく物語っている。

(東北大学教授)